

# デیلیー・ジーザス・ニュース #235

## イエスのエルサレムへの最後の旅

### イエスは三度目に自身の死について教える

MK 10.32-34 ( 並行テキスト : マタイ 20:17-19; ルカ 18:31-34)

32 <sup>M</sup>彼らはエルサレムへ向かう途中だった。

イエスが先頭に立っていたので、弟子たちは驚き、従う者たちは恐れおののきました。イエスは再び十二弟子を呼び、これから自分に起こることを語り始めました。

33 「私たちはエルサレムへ向かいます。そして預言者たちが人の子について書いたことは、すべて成就するであろう。

彼<sup>M</sup>は<sup>MT</sup>は裏切られ、<sup>M</sup>は祭司長たちと律法学者たちに引き渡されます。彼らは彼を死刑に処し、異邦人に引き渡します。34 彼を嘲笑し、唾をかけ、鞭打ち、殺すであろう<sup>MT</sup>十字架につけることによって。<sup>M</sup>三日後に彼は復活する<sup>MT</sup>を人生に。

<sup>L</sup>弟子たちはこのことを何も理解できませんでした。その意味は彼らには全く隠されていたので、イエスが何を言っているのかわかりませんでした。

=====

注: 私たちは「混合テキスト」の原典福音書を次のように上付き文字で識別します: マタイ = <sup>MT</sup>、マーク = <sup>M</sup>、ルカ = <sup>L</sup>、ヨハネ = <sup>J</sup>、使徒行伝 = <sup>A</sup>。この「上付きID」は引用文の冒頭に挿入され、別の上付き文字が現れるまでその聖書を識別します。さらに、**赤いイタリック体はイエスの言葉を示します**。旧約聖書の引用は大文字で書かれています。

コンテキストダイジェスト	
位置	エルサレムへの道のどこか
タイムライン	3月下旬 ( 38ヶ月目 )
イエスの生涯の文脈	第7段階 : ペレアにおけるイエスの宣教
	C. イエスのエルサレムへの最後の旅
タイトル	13. イエスは三度目に自身の死について教える

コメント :

今日の朗読では、イエスは十二使徒に、ご自身の死と復活について ( 福音書に記録されている ) 三度目の教えを与えました。 ( イエスが、共に旅をしていた120人以上の弟子たちから「再び十二使徒を呼び出した」ことに注目してください。 ) イエスは、ご自身の言葉と聖書の教えを成就するために、エルサレムに到着して一週間も経っていませんでした。

## デイリー・ジーザス・ニュース #235

イエスが使徒たちに初めてご自身の死について語られたのは、ガリラヤからの「退去」の途中、カイサリア・ピリピ近郊の異邦人領で行われた「大告白」(DJN #129参照)の時でした。二度目にご自身の死について語られたのは、そのわずか数週間後、ガリラヤでの宣教を終え、一時的にガリラヤに戻られた時でした(DJN #134参照)。それから約7ヶ月後、エルサレムへの最後の旅の最終段階で、主は使徒たちに、聖都における過越祭で何が起ころうとしているのかを再び思い起こさせました。

イエスは、弟子たちと集団で旅をする際、通常は一緒に歩かれました。こうして弟子たちと交わり、絶えず教えを説く機会を得ました。イエスの熱心な弟子たちは、このようにして何百時間にも及ぶ弟子訓練をイエスから個人的に受けました。しかし、エルサレムへの旅の最後の区間において、イエスは集団の先頭を、一人で歩かれました。弟子たちはこれに衝撃を受けました。

イエスが独りで歩いたという出来事は、彼がどれほどの決意と切迫感を抱いていたかを示しています。6ヶ月前、イエスは使命を果たすまでの間、絶え間ない苦悩を感じていたと語っていました(DJN #192; ルカ12:49-50)。そのすぐ後には、エルサレムに関する深い悲しみを描写していました(DJN #198; ルカ13:31-35)。生涯をかけて待ち続けたイエスは、「神の子羊」となるという人生の使命を果たすまで、あと10日ほどとなりました。何物もイエスを止めることも、思いとどまらせることもできませんでした。

弟子たちは、主が情熱的な身振りで自分たちの前を闊歩する姿に驚きながらも、同時に死ぬほどの恐怖を覚えた。皆、主が死刑を宣告され、賞金を懸けられていることを知っていた。一人で歩いている方が、主の身元を特定し、捕らえるのが容易だったのだ。しかし、主はそんなことは気に留めなかった。聖書に預言されていた通り、定められた時に死ぬことを知っていたのだ。

主が、たとえ命を犠牲にしても、父の御言葉に従うという恐れ知らずの決意と献身を、ここに見てください。御自身の犠牲にもかかわらず、父の計画への揺るぎない決意と信仰をもって、自らの十字架を受け入れた主は、私たちの模範です。

応用：

イエスの死に至るまでの従順は、父なる神と私たちへの純粋な愛の表現でした。それは律法主義や、義務のための義務の押し付けではありません。決してそうではありません！

あなたは今日、どれほど従順さを心がけていますか？神への愛に突き動かされ、神の御心に全身全霊で従って前進していますか？

福音書の物語の中で受難週へと急速に近づいていく中で、私たちはイエスが私たちに残した個人的な十字架を負うという模範に焦点を当て続ける必要があります。

あなたは今日、死に至るまで従順であったイエスの模範にどのように従いますか。たとえ大きな犠牲を払うことになっても、イエスへの愛ゆえに、あなたは何を言い、何をしますか。